

【小説】六本木の思い出（その二） 請川 雅春

昭和五十六年が始まり、ぼくの六本木での生活も軌道に乗ってきた。昨年の四月に社会

人となったぼくは、学生時代の怠惰な夜型生活から一気に朝方生活に変わり、身体が慣れるのに数カ月を要した。しかし、今では早朝から夜九時まで勤務する生活が苦にならなくなっていた。それは、防衛庁の組織体系が理解でき、自分の仕事の関係部署と関係者が一致したことで業務処理がスムーズになったことに起因していた。防衛庁での勤務に慣れ始めてきた証でもあった。さらには、役所独特の仕事の手順が煩雑で時間がかかることに、苛立ちさえ感じ始めていた。

そんな正月気分も抜けないある日、昭和五十五年採用同期の朝倉事務官が、ぼくの執務室を訪ねて来た。

「川田、相談があるんだが、ちよつといいか。」
朝倉は、同期の中でも最も気の合った男で、月に数回は六本木界限の安い居酒屋を飲み歩いていた。朝倉の実家は千葉県にあり、今でも実家暮らしだが、出身大学が都内だったこともあり、六本木だけではなく、青山や新宿の店をよく知っており、時には彼の知って

いる店にも連れて行ってもらっていた。

その朝倉が神妙な顔をしていた。

「川田は、外のランチの店に詳しいだろ。どこかいいお店を教えてくださいませんか。」

そう言って手を合わせた。ぼくは、ひよんなことからランチを一緒にする銀行員の女性と親しくなっていた。彼女の名前は山崎玲子、東京生まれで六本木の飲食店をよく知っていた。同期の中では六本木のレストランのことなら川田に聞けという噂になっていた。「それと、明後日なんだが、一緒に食事につき合ってくれよ。」

そして、周辺の課員に聞こえない小さい声で囁いた。

「足立士長をランチに誘ったんだ。オーケーを貰ったが、友達を一人連れてくるそうだから、付き合ってくれ、頼む。」

ぼくは、思わず声をあげそうになった。自衛官の呼称は通常、姓の後に階級を付しており、「足立」は姓で「士長」は階級のことである。いや、最も驚いたのは、足立士長は陸上自衛隊の女性自衛官で、スポーツ万能で容姿端麗、自衛官募集ポスターのモデルと

なったことで有名な、会計隊勤務のアイドル的な女性だったことである。

ぼくは、昨年の秋、レクレーション活動の一環で開催されたバレーボール大会のことを思い出していた。それは、各課、各部隊でチームを組んでの対抗戦で、わが課である法務課も高齢ではあるが参加しており、防衛大でバレーボール部だったという長身の自衛官が一人いたおかげで一回戦を勝ち上がった。そして、二回戦で会計隊と対戦することとなり、そこに足立士長が選手として参加していたのだ。試合は、九人制で行われ、足立士長は前衛中央の固定位置でセッターとアタッカーを兼ねて大活躍していた。ジャンプしながらトスを上げ、強烈なアタックを打ち込んで得点する姿は、他の誰よりも目立っていた。秋の真つ青な空の下で、小麦色に日焼けした手足の長い足立士長がコートの中を華麗に舞う姿は美しすぎた。ぼくは、法務課チームを応援することすら忘れて足立士長の姿を追っていた。

そんなぼくには、彼女をランチに誘う勇氣はなかった。同期の朝倉の顔をまじまじと見

て、この男は何者かと思っていた。そして、ぼくは朝倉にうんうんと頷いて、「いいよ。」と言っていた。

その日は、防衛庁の正門前で待ち合わせをしていた。隣に立っている朝倉は、いつもより緊張した面持ちで「来るかなあ。」と心配そうな顔をしていた。すでに十二時を少し過ぎていた。通常、我々が外で昼食をとる時は混雑を避けるために十分以上フライングするのが常であったが、なかなか現れないことを心配していたのだ。すると、背後から声が聞こえた。

「お待ちせしました。」

振り返ると、ベージュ色のオーバーコートを着たスラリとした足立士長が立っていた。その隣には、襟にファアの付いた薄いグレーのコートを着た石田士長が立っていた。自衛官の制服を着ていない二人は、六本木の街を歩いている普通のお嬢さんと少しの違いもなかった。

石田士長は、駐屯地業務隊の物品の補給管理担当部署の所属で、我々が使う文房具や用紙類である消耗品を管理している担当官だった。一方、ぼくは法務課の公文書管理の担当ではあったが、消耗品類の管理も行っており、月に数回は物品調達の依頼書を提出して

いたし、倉庫での物品の受領でも顔を合わせていた。つい最近も裁判所や法務局に持ち込む書類入れの鞆が破損したということで、石田士長に頼み込んで急な調達をしてもらったばかりだった。朝倉も、足立士長をランチに誘ったものの、一緒に誰が来るのか知らなかったようだ。顔見知りの石田士長の笑顔を見て、ぼくの緊張感も和らいだ。

「石田士長が来るとは思っていませんでした。」

ぼくがそう言うと石田士長が返してきた。

「私は六本木のランチに詳しい川田さんが案内してくれるからと聞いて来たんですけど。」

何故か事前にぼくが参加することを知っていた様子だったが、ぼくがランチに詳しいことを彼女に話した覚えはなかったので、少し驚いた。

「それじゃあ行きましようか。」

そう言って、ぼくは防衛庁の正門を出て、銀行員の玲子さんに最初に連れて行ってもらった和食店に急いだ。

少し出遅れたが、待ち時間なく四人掛けテーブルに案内された。ぼくの正面に足立士長、斜め向かいに石田士長、隣が朝倉という配置となった。コートを脱いだ足立士長は薄いピ

ンクのカーディガン、石田士長は白いセーターを着ており、自衛官の制服姿ではない二人の姿は新鮮であった。

「ここのお薦めはすき焼き御膳ですよ。」

ぼくが、そう言ったが、朝倉と足立士長は懐石御膳を注文したので、彼らもこの店に来たことがあるのかもしれないと思った。

ぼくは、どうしても顔見知りの石田士長に語りかける回数が多くなっていた。

「先日は石田士長に無理なお願いをしてみました。」

そう、お礼を言った。

「陸幕からの急な注文は、いつものことですから大丈夫ですよ。それより、川田さんは何故六本木のランチに詳しいんですか。」

ぼくは、昨年親しくなった玲子さんのことを誰にも話していなかった。すると、朝倉が横やりを入れてきた。

「そうなんだよ。川田は挙動不審で昼も夜も六本木を徘徊しているみたいで、妙に詳しいんだ。札幌で四年間冬眠していたから、六本木のような賑やかな街が珍しいんじゃないのか。」

ぼくは、話題を逸らしたかった。

「ところで、石田さんと足立さんは業務隊と会計隊で、所属する隊が違うけど以前からの

「お知り合いなんですか。」

「ぼくは、お互いの距離を縮めるために階級の呼称を外した。石田士長が直ぐに反応した。」「足立と私は同期なんです。朝霞の教育隊と一緒に新隊員教育を受けた仲間なんです。」

朝霞とは埼玉県朝霞市にある陸上自衛隊の駐屯地で、関東で採用された女性自衛官が集められて新隊員教育を行う場所で、教育部隊とその施設がある。新隊員教育とは、一般社会でいう新人研修にあたり、通常、高校を卒業したばかりの若者が集められて、自衛官として必要な資質を養うとともに、知識及び技能を身につけさせる教育訓練のことである。

石田士長は、当時を思い出したのか、朝から就寝まで時間に管理された厳しい訓練だったこと、最初の一月で十数名が退職したこと、苦しい毎日が何故か同期の結束を強めたことを一気にしゃべった。

「足立は体育会系だから大丈夫だったんだろうけど、私は高校時代、特に運動をしていたわけではなかったから辞めていった彼女達の気持ちがよく分かるんだよね。」

石田士長が一息ついたところで、ぼくは足立士長に話を振った。

「足立さんは大丈夫だったんですか。」

足立士長は、大きな黒い瞳をぼくに向けて、えつという表情をした。

「全然大丈夫じゃありませんでしたよ。好きなスポーツの練習をする部活とは比べ物になりません。私も最初の一月はいつ辞めようか、誰に相談しようか、そんなことばかり考えていました。夜は二段ベッドで、私は上の段で寝ていたんだけど、下の子のすすり泣きが聞こえてきて、昼間元気なこの子も頑張っているんだなあと思うと自然と涙が溢れてきて、あともう一日だけ頑張ってみようかと思いつながら寝ていました。」

「足立でもそうだったの。」

石田士長は、当時を思い起こしている様子で、「うんうん」と頷いていた。

ぼくは、昨年四月に採用されて直ぐの五月の連休明けに、東京都小平市にある陸上自衛隊の学校で、二週間の泊まり込みの研修を受けたことを思い出していたが、朝倉も同じことを思っていたようだ。

「俺ら事務官も、小平学校で二週間の初任研修を受けたけど、朝早く、六時頃だったかなあ、起床ラッパに起こされて、点呼をとって、体操して、駆け足して、部屋に帰ってから掃除と身の回りの整頓、それから朝の食事をとってから八時だったかなあ、午前中の授業が

始まるんだ。」

朝倉の言葉を聞きながら、ぼくも当時を思い起こしていた。あれからまだ一年も経っていないのに随分遠い昔のことのように思われた。

我々の研修の主任教官は三等陸佐の自衛官であったが、前年まで六本木の陸上幕僚監部の防衛部に勤務していて事務官の実態をよく知っていたせいかな、我々の扱いには随分気を使っていた。

事務官の初任研修は、自衛官での新隊員教育に匹敵するが、自衛官と同様の厳しい教育を行って脱落者や退職者を出してしまうと、その後の手続きが大変なこととなるのかも知れない。

主任教官は毎朝八時からの授業前に教壇に立って、我々に優しい言葉をかけてきた。「皆さん、昨日はよく眠れましたか。眠れなかった方は挙手願います。」

ここで教育を受けている採用同期は二十二名で、その内の数名が手を挙げていた。主任教官は一瞬の間において、「体調がすぐれない場合は、後で教官室に来て下さい。」

そう言って教室を後にしたが、教官室に行った同期はいないはずだった。

ただ、教室外での教育、特に朝の点呼から教室に入るまでと、夕方五時以降の我々への指導は助教と呼称されている、階級が三等陸曹の我々と同世代の自衛官が三名で交代に担当しており、当初、彼らは我々を自衛官の新隊員と同様に扱っていた。

朝、起床後のベッドの整頓はホテルのベッドメイキングに近い要領での作業を要求され、乱雑だとマットごと床に投げられ再度のメイキングを要求された。昼休みに宿泊場所に帰るとマットと毛布がひっくり返されていることもあった。

夜には、研修初日に貸与された作業服、一般的には戦闘服と呼ぶほうが適切なゴワゴワした厚手のポケットが異様に多い服を着用しての集合が命じられた。

夕方、この作業服にアイロンをかけることを命じられており、皺が多いとかけなおしを要求されたし、ポケットのボタンが外れているとの指摘を受けた場合は、指摘一点につき腕立て伏せを十回要求された。

年齢があまり変わらない若い自衛官に命令され、同期生の何名かが不平不満を言い始めていた。誰かが主任教官に言いつけたのか、研修生が毎日交代で記帳している当直日誌に誰かが書いたのか、それとも当初の予定だ

ったのか定かではないが、最初の三日で助教の指導は止んだ。

朝倉は、当時の苦勞した体験についてジョークを交えながら饒舌に語っていたが、彼女達の新隊員教育の厳しさとは比較にならないことは明らかだった。

ぼくは、以前、銀行員の玲子さんに自衛隊現地研修に参加して、「落下傘降下訓練」という十一メートルある鉄塔から飛び降りるバンジージャンプのような訓練の恐怖体験を話して、大喜びされたことを思い出して、同じ話を繰り返したが、自衛官の彼女達にはお遊びの訓練にしか思えなかったのか反応は乏しかった。

最初は、少し硬かった足立士長も打ち解けてきたのか、高校の部活はバレーボールだったこと、自衛隊では資格を取って一年後に任期満了で退職する予定で、資格を生かした職に就くつもりだと語った。ぼくは、やはりバレーボールの選手だったのかと納得したと同時に、民間の企業に就職すると聞いて残念な気持ちになった。

一方、石田士長は今年の幹部候補生試験を受ける予定で、幹部自衛官を目指すと言った。二人共、第二次オイルショックの就職難の時代に高倍率の女性自衛官の採用試験に合

格し、厳しい訓練にも耐えてきた優秀な女性達であった。

朝倉の誘った足立士長が、ぼくの正面に座っていたため、ぼくの質問が足立士長に集中していたことが気になっていたが、それが不自然に思えないほど、ぼくら四人の距離は近くなっていた。

ぼくは、気になっていた質問をしていた。「足立さん達は今どこに住んでいるんですか。」

若い自衛官が、勤務している駐屯地のなかにある隊員宿舎で居住していることは知っていたが、この六本木の駐屯地にそれらしい建物はなかった。

「市ヶ谷駐屯地に隊員用の宿舎があって、女性自衛官の隊舎もあるんです。私たちはここに住んでいて、住民票の住所も駐屯地内になっ

っているんです。」
東京の地理に不案内なぼくは、「市ヶ谷」が東京のどこにあって、六本木からの位置にあるのかも知らなかった。そして、「市ヶ谷駐屯地」が歴史的な場所、太平洋戦争終結後に日本の指導者達を裁く東京裁判が行われたこと、近年では三島由紀夫が割腹自殺した場所ということも知らなかった。
「市ヶ谷から通っているんだ。」

ぼくは、呑気な返答をしていた。

あつという間に時間が過ぎ、気が付くと昼休み終わりの時間が近づいていた。手際のいい朝倉は、既に会計を終えており、

「そろそろ行きましょうか。今日はお付き合いただいたき、ありがとうございます。」

そう言つて席を立つた。名残惜しかったぼくは、「また、ご一緒してください」と言い、彼女達二人共、「是非。」と言つて笑つた。

四人は正門をくぐり、其々の職場に戻つて行つた。

ぼくが法務課の自席に着いてから三十分も経たないうちだったが、採用同期の中山事務官が血相を変えて飛び込んできた。中山は我々同期のなかでも変わり種の経歴で、本来は、防衛大学を卒業して自衛官に任官するはずだったが、所属する野球部の練習で膝を壊したため、自衛隊の医官に『自衛官としての訓練には不適格』と診断され、泣く泣く事務官に転向した男だった。彼の防衛大学校での知識と経験は、我々同期生を随分助けてくれた。今は、会計隊の総務科勤務で、足立士長と同じ執務室のはずだ。

「川田、お前何をしているんだ。」

その大きな声に周りの自衛官が振り向いたので、中山はぼくの腕を取つて、給湯室に

連れて行つた。

「訳がわからないんだけど。」

「バカ、お前、今日の昼休み足立士長を外に連れ出しただろう。」

「えっ、一緒にごはん食べただけだよ。朝倉と業務隊の石田士長も一緒だし。」

「石田士長も一緒か。」

呆れたという表情をして、大きく息を吐くと、中山は少し落ち着いた様子になつてきた。

この時点でも、ぼくは見当違いのことを考へていた。ぼくが思い出したのは、昨年の四月に防衛庁に採用され、陸幕法務課に配属されて直ぐの頃、法務課長から面談を受けたことだった。その時に言われたのは、『覚えといて欲しいが、自衛隊は酒の上での失敗には比較的寛容だけれども、女性に関する不祥事には厳しいところだ。貴官は、まだ若いのでいろいろあると思うが、気を付けてくれ。』という言葉だった。だが、ぼくに疾しいところは少しもない、そう思つていた。

「会計隊の永井三佐に目撃されたみたいだ。三佐の言葉から、お前と朝倉の名前が出ていた。お前達は知らなかったのか。自衛官で陸曹、陸士は管内居住の義務があるんだ。勝手に駐屯地の外に出たはいけないんだ。許可もなしに勝手に外出したことで、足立士長が三

佐から随分叱られて、泣いていたぞ。」

ぼくには、自衛官の管内居住義務と外でランチしてはいけないことが繋がつてなかつた。中山の言うことがよく理解できなかったが、足立士長が泣いていたことは大きなショックだった。

六本木の街では足立士長と同年代の女の子達がオールナイトのディスコで踊つている。いや、オールナイトでなくても、おしゃれなバーで流行の服を着て気の合つた仲間達とお酒を飲んだり、音楽を聴いたりして楽しく過ごしている女の子は山ほどいる。同じ六本木でも、防衛庁の塀の中にいる彼女たちは昼休みのランチで外出することさえも禁じられているのか。ぼくは、哀しくなつた。

そして、ぼくは再び小平学校での二週間の初任研修を思い出していた。営内の宿舎で缶詰になつて二週間は息苦しくて仕方なかった。研修が終わつて帰宅についた電車では解放感いっぱい視界が開ける気分だった。足立士長達は、その管内生活を三年も続けていけるのだ。

「ぼくが、永井三佐に謝れば収まるかなあ。足立士長達は許されるかなあ。」

ぼくは、これ以上足立士長達が傷つけられることに耐えられなかった。そして、ぼくは

中山と一緒に永井三佐のところへ行つて謝罪することにした。

ぼくが足立士長を誘つたこと、陸幕の法務課に所属していながら自衛隊に関する規則を知らないぼくは大バカ者だつたこと、規則違反したことを法務課長に知らせてもいいこと、足立士長には非がないので叱らないでほしいこと、もう二度と足立士長を連れ出さないこと、脈絡のないことをくどくどと説明して、申し訳ありませんでしたと頭を下げた。その時、何故か隣で中山も頭を下げていた。

永井三佐は殆んどしゃべらずに、

「分かつた。今後二度と、このようなことがないように。」

そう言つて書類に目を落とした。

そして、足立士長のところへも行ったが、「ごめんね。」としか言うことができなかつた。そんなぼくに、

「いいんです。今日は楽しかったです。」

そう言つた彼女の顔を直視することができなかつた。そして、昼休みには着ていなかった自衛官の制服のボタンばかりを見ていた。それは、キラキラした金色で、桜の花びらをデザインしたきれいな柄だつたが、ぼくは、防衛庁に入つて初めてそのデザインに気が付いた。いつもそうだ、ぼくは分かつたつ

もりでいても、本当は何も分かつていない。

ぼくはその足で石田士長の執務室に急いだ。石田士長は、いつもの机に座つて消耗品リストに目を通していた。仕事の邪魔をするように気が引けたが、同期の中山から聞いたことを簡単に話し、永井三佐のところへ謝罪に行つたところまでを説明した。

石田士長は、大きく溜息をつきながら、

「永井三佐の営内居住義務違反についての話は正論だね。ただ、普通の営内居住の場合、居住場所と勤務場所が同じになるけど、私達の場合は、居住場所は市ヶ谷駐屯地で、勤務場所はこの六本木の檜町駐屯地だから、ちよつと事情が違うと思うんだけどなあ。」

そう言いながら、昼食会による歓送迎会や郵便局や銀行の手続きなどでの昼休みの外出は自由にしていただけと話した。幹部候補試験を受けるといった彼女の話は理路整然として説得力があつた。

「営内居住義務違反か。」

もう一度繰り返す石田士長の声を聴きながら、この用語を最近何かで見た覚えがあることに気が付いた。状況は全く違つたが、法務課書庫に保存している書類の文章の中にその文字を見た。

それは、昨年末の十二月初めのことだつた。

ぼくの担当業務は公文書の管理や物品の管理で、直接法律に関する業務に携わることは殆んどなかつたが、法務課長から少しずつ法務業務を勉強しなさいと命ぜられ、当時マスコミで報道されていた自衛隊の訴訟事案の公判を見学に行くこととなつた。

その事件とは、沖繩の日本復帰が翌月に迫る昭和四十七年四月二十七日、六本木の防衛庁正門前に、報道陣と弁護士を引き連れた制服姿の自衛官五人が現れ、防衛庁長官に宛てた文書を持参して長官への面会を求めたことに端を発していた。さらに翌日、彼らは制服姿で東京タワー横の芝公園に約八千人が集まつた沖繩反戦集会に参加した。それら一連の行動が自衛官の服務規律義務違反として懲戒免職になつた。彼らは、その取り消しの訴訟を起こしており、東京地裁で公判が続いていた。懲戒免職となつた理由のひとつが「営内居住義務違反」であつた。

公判見学の前に、ぼくは書庫にある膨大な訴訟資料を丹念に読みこんでいた。

自衛官五人は休暇届を出して行動を起こしていたが、部隊長は直ぐに休暇を取り消した旨の文書を、防衛庁正門で同行していた弁護士宛てに送付していた。それは、自衛官五人の所在場所が分からなかつたため、正門前

で担当官に名刺を渡していた弁護士に郵送していたのだ。それでも自衛官達は部隊に帰還しなかったために「営内居住義務違反」となったのだ。懲戒免職の理由はそれだけではなかったが、「営内居住」が自衛官の重要な義務のひとつであり、違反した場合には何らかの処分が言い渡されることには違いがなかった。

ぼくは、自分が日々防衛庁の法律に関する文書や書籍に囲まれて仕事をしているのに、自衛官の重要な義務のひとつも理解していなかったのかと、忸怩たる思いでいっぱいだった。法律とは人を守り、組織を機能させる大事な規範であり、その業務の一端でも関わることができることに誇りさえも感じ始めてきていたのに、ぼくよりも年の若い女性自衛官さえも守ることができなかった。「川田、お前何をしているんだ。」中山の言葉をもう一度自分につつけていた。

ぼくが、あまりにも情けない顔をしていたのか、石田士長が声をかけてくれた。

「川田さん、あなたのせいじゃないよ。自衛隊は普通の社会の物差しでは測れないことがいっぱいあって、何年もその中で生活している私達でさえ理解できないことがまだまだ沢山あるのよ。」

そう言って、さらに付け加えた。

「足立は、見かけが派手だけど、おとなしくて素直ないい子だからよろしくね。」

何のことを言っているのか理解できなかったぼくは、大きく目を見開いて、びっくりにした表情をしていたかもしれない。年下のはずの石田士長がお姉さんのように見えた。

そして、この時に少しだけ気付き始めた。朝倉が足立士長に電話した時に、川田と一緒に食事したがつていること、それに、川田は六本木のランチの店をよく知っていて足立士長にご馳走したがつていることなどを話したに違いない。それで、足立士長は、ぼくと顔なじみで同期の石田士長に相談して一緒に来てもらったのだ。

朝倉には駐屯地バレーボール大会の時の足立士長の活躍についての話をしていたので、何か勘違いされたかもしれない。昨年末から気落ちしているぼくを元気づけようとして今回のランチを企画してくれたのかも知れない。残念ながら、ぼくは、まだ玲子さんと会えなくなっただメージから立ち直ってはいなかった。

朝倉にも、もっといろいろ話をしなければならぬ。そして、足立士長と石田士長に今後どうお詫びすればいいのか相談しなければ

ばならない、そうぼんやり考えていた。昭和五十六年のぼくの六本木での生活は始まったばかりだった。(了)



防衛庁檜町駐屯地